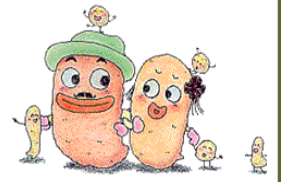


## 湯戸飛夜いけいけだより



Jinen Joe family

## 発行 西徳山まちづくりの会

## 記事:

- ・ 令和2年度の活動を検証する
- ・ 連載小説  
『男でござる 新説天野屋利兵衛』  
第2回
- ・ 名所・旧跡めぐり  
「皆に愛される戸田の河津桜」
- ・ 今後の行事予定

## 会員募集中

あなたも「西徳山まちづくりの会」で一緒に活動しませんか。会では、常時、会員を募集しています。

E-mail:

nishitokuyamamatizuk  
urinokai@gmail.com

## 令和2年度の活動を検証する

令和2年3月から5月にかけて、臨時休校や市の施設の使用禁止があり、西徳山まちづくりの会令和2年度総会は中止しました。また、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、密閉、密集、密接の3密を避けること、不要不急の外出をしないことが重要であり、ほとんどの行事やイベントは中止となり、まちづくりの会の活動も縮小せざるを得ない状況でした。

## (1) 戸田駅を中心とした活動を継続する。

- ①毎月第2、第4土曜日に戸田駅前の清掃及び花壇の手入れを実施しました。花は、年に2回植え替えています。夏場の花壇の水遣りを当番で行いました。
- ②令和2年度周南市花壇コンクールに応募し、「特別賞」を受賞しました。
- ③戸田駅前広場で令和2年7月18日と令和2年11月7日に「駅前ビアガーデン」を会員だけで開催しました。

## (2) 「道の駅ソレーネ周南」を拠点とした活動に取り組む。

- ①『ソレーネ周南イベント実行委員会』に会から委員を出しました。例年開催の「ソレーネ周南周年記念」及び「西徳山いけいけ大収穫祭 in ソレーネ周南」は開催されませんでした。

## (3) 西徳山の発展を目指した新たな活動に取り組む。

## (4) 交流・研修・広報活動に取り組む。

- ①令和2年度研修視察は中止しました。
- ②広報誌を令和2年4月1日号と令和3年1月1日号の2回発行し、新聞折り込みで湯野、戸田、夜市地区に配布しました。

## (5) 組織を充実し拡大する。

- ①令和2年6月から令和3年3月の間、毎月第3水曜日に映画鑑賞会を開催しました。

## (6) 他の諸団体と連携し効果的な活動を展開する。

- ①「周南こどもゆめまつり」は開催されませんでした。
- ②戸田駅前花壇で「公園花とみどり課」と「種から育てる花作り」を連携して進めました。周南市で開催された地域花壇研修会に参加しました。

連載小説

『男でござる 新説天野屋利兵衛』

第二回 文城山耕作

神村将堅

二（前号続き）

「神村将堅という者がおります。筆にも算盤にも長け、刀槍の腕前もなかなかのものでございます。萩の有望株でございます。ただ・・・」と側近が言くと、

「ただなんじゃ、申せ。」

「これからの萩を背負う男ゆえ、徳山へ送るのは惜しくも思われます。」

藩主の綱広は、しばらく考えた。徳山は萩と違い山陽沿いである。今後重要な位置づけになるであろうという思いに到った。

三

「神村をこれへ呼べ。」

側近は直ちに神村の屋敷へ行き、事情を話した。将堅はしばらく物思いにふけり、大きく頷くと、城へ向かった。

「神村将堅にございます。」

「そちが神村か。よくぞ来た。大儀である。」

「はっ。」

「そちに家老として徳山へ行ってもらいたい。そうして、萩と徳山の間がうまくいくように取り持つのじゃ。」

「はい。承知しました。」ほとんど即答であった。

「申し上げます。萩の家はわが長男に家督を譲り、私は単身徳山へまいります。」

「何故そのようなことを申す。萩を捨てるというのか。」

「はい、行くからには徳山に骨をうずめる覚悟でございます。ですが、萩の御恩は決して忘れることはできません。見事に萩と徳山の関係を取り持つて見せます。」

今の時代でも市の副市長を県から迎えて、市と県のパイプ役としてその活躍を期待されるのがよくあるが、幕藩体制下でもその形がとられていたのである。

面白くないのは新採当初からいる市の職員である。よそから知らぬものが突然迎えられる、その人間の指示に従わなければならぬ。市長は市の職員の能力を信頼できないのかということになる。この時も同じように藩主は、生え抜きの家来を信頼できないのかと、徳山藩では色めき立つ者もいたのではなからうか。

こうして、神村将堅は徳山藩の家老に就任したのである。時に、寛文7年（1668年）、将監29歳の夏のことである。その後、江戸の三田にある藩邸にずっと住んでいる藩主就隆の城代家老として、よく徳山藩の政を治めた。

四郎谷

一

将堅が家老に就任して二年の月日がたったある日のこと、数人の藩士が何やら侃々諤々話し合いをしているところに出会った。

「何事でござるか。そんなに難しい顔をして。」と将監が問うと、

「四郎谷という所のことでございます。」

「四郎谷がどうした。」

「はい、四郎谷は元和三年（一六一七年）萩から分家されて以来、徳山藩のもの

でございます。ところが、萩本藩の堅田様の知行地と入り組んでおるので、争論がたえません。この度も、境をめぐるていざこざがおきております。」と藩士が答えた。

「わかった。私が四郎谷へ出向いて、話を聞いてこよう。」

「いいえ、ご家老自らが出向かれるようなことがあってはなりません。私どもが何とか致します。」

「こういうことはきちんとしておかないてはならない。ことによると堅田殿と話し合いの場を持たなければなるまい。」

こうして将監は供のものを連れて、四郎谷へ土地の人の話を聞きに出向いたのであった。

山陽道を下り、戸田村から左へと間道を歩く。道は登りに差し掛かり、峠に到る。峠を少し下ると四郎谷の里が眼下に見えてきた。収穫を終えた棚田が見事に並んでいる。将監は春の水田の頃、収穫前の稲穂が実る頃の風景を想像してみても、「ほお」と、感嘆の息を漏らした。

四郎谷の里について、庄屋や村の世話役などから事情を聞いた。話はたわいもないことで、四郎谷の村人が境を超えて松の木を伐ったとかなんとかの口論であった。将監は、

「この場合は、この神村に預らせてもらうわけにはいくまいか。」と提案すると、

「そりゃあ、ご家老様のお預かりなら文句はございません。」とその場合は収まった。

秋の日暮れは駆け足で訪れる。気づくとあたりはうす暗い。将監と供の者たちは宿屋と思われところに、庄屋らによって案

内された。藩政の責任者が訪れたのであるから、里の人々も将監一行を下にも置かないもてなし様である。庄屋は、

「もうとつぷりと日も暮れたことでございます。今宵はごゆっくりしてください。」

供の者の計らいで、その日は酒肴付きの宿泊ということになっていた。市長の秘書が、帰りが遅くなるので宿泊の用意をしたという所だろうか。

ここで、四郎谷になぜ宿があるのかについて言及しなければならぬ。この物語の冒頭で、四郎谷の地形について少し触れたが、左右の岬が両腕で抱きかかえるように突き出ていて、その奥まったところ、つまり胸のところが四郎谷である。当然、風で走る船の時代においては絶好の風よけの湾になる。嵐の時など長旅の船がその白帆をたたみ、乗組員たちの疲れを癒すところとなる。

当時の長旅の船といえば、後述するようになるが、北前船の西廻り航路ということになる。

## 二

ここで、戸田村と湯野村はその当時萩の本藩の堅田氏の知行地であった。戸田の四郎谷も本藩に属するのかもしれないが、四郎谷は確かに徳山に属していたのである。そのあたりの境界は当時の入り組んだものである。現在とは事情が異なっていたのであろう。

将監一行は宿の広間に通された。部屋は立派な書院造で床にはたらし込みの水墨画が書かれてある。上方の名のある絵師の手によるものと思われる。夕食の膳は既に並べ

てあり、料理は山海の珍味に加え珍しい酒の用意もおさおさ怠りない。

「これらの物は、弁才船が置いていったものでございます。珍しい陸奥や北陸のものもございます。ごゆるりと堪能ください。」と庄屋は得意そうに言う。

「では、馳走になろう。」一行はそれぞれの席に腰を下ろした。

酌をするのは、里の女たちである。いずれもあか抜けて、立ち居振る舞いも場慣れし、しかも毅然としている。その中でひときわ美しい娘が目についた。

将監は一目でその娘の美しさに衝撃を受けた。三十歳のこれまでに初めての胸の高鳴りであった。フォーリンラブである。幸いにもといていいのかわいのか、萩の本妻は実家に帰して、徳山に骨を埋める気持ちで赴任している。

将監は、庄屋に娘の名前をそれとなく聞いてみた。

「あの娘は萬と申します。氣立ての優しい子で父親を早くに亡くし、母親と二人暮らし、孝行者でございます。」

「萬とやらをこれへ。」将監は緊張して申し付けた。庄屋は奥へ引っ込んだ萬を呼んだ。背はすらりとして俯き加減なその美しい姿を見て、将監の心は、ますます萬に奪われていった。

言い忘れていたが、将監は背も高く、涼しい目をした偉丈夫である。

「ごようでございますか。」萬が言う

と、庄屋は、  
「ご家老様がお呼びじゃ。さあ側に座ってお酌をなささい。」  
萬は将監の向かいに座ると、

「萬ともうします。ご家老様、おひとついかがでございますよ。」と、慣れぬ手つきで酌をする。その初々しさがたまらなく良い。将監は、ぞっこんである。

「私は、神村と申す。」続けて、  
「あなたのその懐に入れてある書物は何ですか。」

「あつ、こんなものを持ち歩くなんて、気が付きませんでした。これは、弁才船の船頭さんからもらった句集という物です。十七文字でこの世の機微を表す優れたもので、俳諧といって上方で流行っているものでございます。私はこの中で、宗房という人の句が大好きなので、持ち歩いて覚えようとしているのです。」

「ほう、俳諧ですか。」  
「そうです。いつか私も宗房さんのような句を作りたいと思います。」

「お萬さんは、字が読めて句も詠めるのですね。」  
「ひとりで一生懸命学びました。」

萬のその知的なところに、将監の心が大いに揺さぶられる。

宗房とは後の松尾芭蕉のことである。このころから大阪で名を売り始めていた。

「食事が終わったら、私の部屋へ来てくださらぬか。その句集とやらを見せてもらいたい。俳諧とやらを私に教えてくださらぬか。」

「わたくしのようなものが、ご家老様に教えるだなんて、とんでもないことです。句集をお見せに参ります。」

将監の胸は早鐘のように高鳴ったのは、言うまでもない。

(以下次号)

## 編集後記

徳山七士の物語が終わったので、前号から「新説 天野屋利兵衛」の連載が始まった。

そのいきさつは、誰か物語を書いてくれる人はいないだろうかと思案し、自称地域の文豪である城山耕作先生に、お願いにうかがった。先生は次のようなことを言われた。

四郎谷に石碑がある天野屋利兵衛の物語はどうだろう。忠臣蔵を支えた一人の商人の生涯を描くのだ。徳山藩の家老の神村将監のことや、四郎谷が風待ちの入り江だったこと、その頃ちょうど河村瑞賢によって西廻り航路ができたこと。一人の若者が船乗りにあこがれて、水夫になり、大阪まで行く。やがてその能力が認められ、天野屋の婿養子になる。という物語だ。

赤穂藩とのつながりは、どのようなものかと尋ねると、廻船問屋天野屋が苦境に陥った時、赤穂藩の家老大石内蔵助に塩の運送の注文をしてもらった。それで、天野屋は苦境から抜け出した。その時の恩義を忘れることなく、赤穂浪士の討ち入りの時武器の供与に奔走したのである。とのことだ。

ということで、城山耕作先生にお願いすることになったが、この先生は怠け者である。なんとか最後まで仕上げてもらいたいと思うが、いかが相成りますことやら。

### 発行責任者

会長 神本康雅  
広報部長 木曾裕子

### 西徳山まちづくりの会

ホームページ URL:

nishitokuyama.web.fc2.com

## 名所・旧跡めぐり

### 「皆に愛される戸田の河津桜」

戸田国道沿いに流れる夜市川の土手に今年も河津桜が満開となりました。花見に訪れる人も多く、この桜のお世話をされている「こもればの会」代表の堀本さんにお話を伺いました。

このさくらの土手は、平成13年に市の環境創生21事業にのせて、地域の憩い遊歩道として企画・整備したのですが、国道の拡幅工事のため取り壊しになり、新たに河川整備された現在の土手に、県の許可を得て植樹したものです。

さくらを植えたのは、この場所が比較的西風が強く、そのためか他の地方より遅れて開花するので、毎年3月の月上旬に満開になるさくらをとの思いで、河津桜を植えました。樹齢は今年で10年目です。

この遊歩道をこもればの道と名付けたのは、最初に整備した道には多くの樹木があり、その樹木の間から差し込む光から名付けました。その後、佐畑から下流へ延長・整備を進め地区唯一の自然遊歩道となりました。これまで多くの地区の皆様にご協力を頂き感謝しています。

来年はもっと多くのさくらが咲いてくれることと思います。是非、皆さん来て見て～ね。



### 今後の行事予定

#### 西徳山まちづくりの会全体会

原則として毎月第1水曜日の19時30分から夜市市民センター

#### 戸田駅前広場周辺の清掃

毎月第2、第4土曜日の16時から、戸田駅前広場の清掃と花壇の手入れを行っています。

お手伝いしていただける方、大歓迎です。